

池田龍眠は本名池田英夫。明治28年(1895)12月18日、当時の揖保郡網干町余子浜に材木商の父百松母みちの長男として生まれた。姉がいたが、20歳ぐらいの時に亡くなった。次男は池田家の本家筋にあたる堀本家の養子に入り、三男は武庫川女子大学名誉教授で英文学者の池田昌夫である。この原稿の多くは昌夫の長女の松美さんから聞き取ったものである。龍眠は旧制姫路中学を卒業後、家業の材木商に従事する傍ら、書道や絵画を嗜んだ。絵画の師は当時網干で活躍していた興浜の小野周文である。

しかし大正9年(1920)の春、結核に倒れ、半年ほど前に御津町中島から迎えたばかりの妻も離縁せざるを得なかった。今日では結核は治療法が確立されているが、当時は不治の病ともいいくものであり、その絶望感はいかばかりであっただろう。ちなみにその妻であった女性はのちにどこかの寺に嫁いだらしい。生死をさまようような闘病生活の中で、龍眠は句作を始めた。最初はホトトギス派の花鳥諷詠・五七五の定型俳句を学んだが、心を満足させるに至らず、当時俳壇革新の先頭に立って自由律俳句を提唱していた荻原井泉水に共鳴して、荻原が主宰した「層雲」に入って作品を発表するようになった。そしてそれらの作品をまとめて、昭和7年(1932)12月5日、句集「陽を浴びて」を発刊した。これは大正14年(1925)～昭和6年(1931)を第1部、大正9年(1920)～大正13年(1924)を第2部とし、第1部が「層雲」に参加してからの句である。句集の題字と序文は井泉水の手になるものである。この序文によると、井泉水は「池田龍眠君には未だ逢った事がない。然しながら、しばしば逢った人よりも以上に君の生活や気持ちに私は分かっていると思っている」と病床にありながら真剣に句作に励んでいる姿に深く理解を示している。この句集からいくつかの作品を紹介しよう。

「吐いても吐いても痰が出る風の日が暮れる」

「妻子を持たず炭斗の底がでてゐる」

「つばめ来たか今年も病んでゐる」

「椿落ちるにまかせ病みこけてゐる」

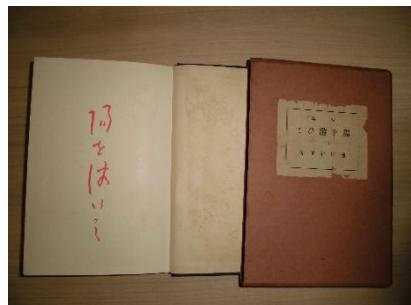
「友の絵を壁にかけ病んで十年となる」

病と闘いながらも、身の回りのささやかな自然に向けるまなざしが痛々しい。龍眠はこの半年後の昭和8年(1933)4月4日、この世を去り、前年の10月に亡くなった父百松のために近くの法専寺(浄土真宗本願寺派)に建てたばかりの墓に葬られた。享年39歳の若さであった。

網干歴史講座会員 浜田 中川千里



池田龍眠遺影(池田松美さん蔵)



句集「陽を浴びて」  
荻原井泉水による題字と外函  
(姫路文学館蔵)



池田龍眠作 墨彩画  
(池田松美さん蔵)